

【特別収蔵展】『原田濱人とその思いを受け継ぐ人たち』

原田濱人は明治・大正・昭和の激動の時代を俳句ひとすじに生き抜いてきた浜松の俳人です。師高浜虚子との論争を経て「物心一如」を旗印に生まれ故郷の浜松に根を下ろし、浜松の俳句活動に熱心に取り組みました。昭和14年に俳誌「みづうみ」を創刊しますが、戦争による統制で昭和16年「みづうみ」は「すその」と合同し、「ひこばえ」になりました。しかし、昭和22年「みづうみ」は再発足し、その思いを受け継いだ浜松の俳人たちによって今年5月に千号を迎えます。



春風に雌を率いて軍鶏の闊歩かな



大正3年、この句が「ホトトギス」に初入選し、高浜虚子に注目された濱人は虚子を師と仰ぎ、句への情熱を頂点まで高めていきました。大正11年に沼津中学に赴任した濱人は、地方俳誌「すその」の課題句選者となりますが、「ホトトギス」に掲載された俳句を批評し、これに虚子が反論して誌上論争となります。濱人はこれを機に「ホトトギス」を去り、「すその」で自らの俳句理論を実践しました。昭和7年、故郷である浜松に戻り、「みづうみ」を創刊し、同じ年の7月には、虚子を訪ねて、主張の開きから疎遠であったことを詫び、交流が再開されました。浜松に根をおろした濱人は、己の信条である「物心一如」の主張を作句活動に生かしていきます。

濱人の言う「物心一如」とは、郷土の自然と作者の心が一体化し、郷土の自然や人情の中に己を据えて、自然の句も人事の句も、すべて郷土の風物と不即不離の関係にあるとき、句の内容に力が生ずるということです。濱人は自らも生活実践の中で作句を続けました。

夕蟬のふるさとに着く俣かな (浜松市三方原墓園にある句碑)

原田濱人は昭和47年、88歳で波瀾の生涯を閉じますが、濱人の偉大な業績と「物心一如」の思いは、俳句結社「みづうみ」の二代目主宰大橋葉蘭、三代目主宰鈴木保彦、四代目主宰大城如舟、五代目主宰笹瀬節子を中心に、脈々と多くの門人たちに受け継がれています。<県内各地に建てられたいる濱人の句碑>

「玉磨(す)りていにしへの日は永かりき」沼津市香貫山

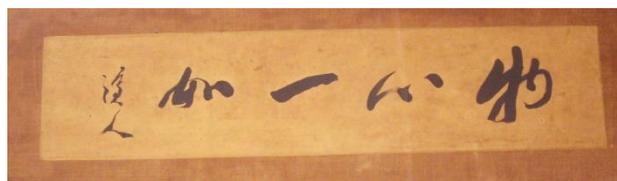
「夏雲や湧き諸瀧は鳴りに鳴る」富士宮市狩宿下馬桜

「籠坂の月夜遅し谷の虫」小山町籠坂峠

「鳴すでに一連ととぶやその空」浜松市弁天島

「秋惜しむ松に夕日や館山寺」浜松市大草山

「笹鳴きの消ゆれば波の音ばかり」浜松市館山寺



【原田濱人の俳句理念をあらわした扁額】